【ねがいましては】

平成２２年１０月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２４０号

「責任感」

ラジオから、毎回のように著名人の方々の興味深いお話が流れてきます。

今回は国立東京藝術大学の学長さんでいらっしゃる宮田亮平さんです。とても明るいお話しぶりの中に、幼少期からの親の育て方に触れられていました。「実は私、親から『〇〇しなさい。』と、言われた事がないのです。」

はっとさせられました。ご両親がなぜそのような育て方をされたのか、宮田さんがお話されると同時進行で、私の中にも全く同じ感情が走っていました。

命令をしないということは、すべての行動や考えがその本人の責任となる。自分のしでかしたことは、すべて自分で事後処理をしなければならないことになるわけで、きわめて慎重な行動を強いられることになる。

それを幼少の頃から実践に移されていたわけで、おのずと集中力も極まっていくはずです。失敗すれば、すべてが自分の責任、迷惑をかければすべてが自分の責任。事後処理にも大変な苦労を伴うことは必至。

かといってご両親は完全に放任主義をあてこんで、知らん振りをなさっていたわけではないはずです。監視の目をしっかりとお持ちになり、『あり方』をご説明なさっていたと思うのです。

すべて上手くいくわけがない、事を起こした後の事後処理について、どうあるべきかをしっかりとアプローチなさっていたのではないかと思います。でも、責任はあくまでも本人にあることは曲げない・・・。

小さい頃から責任の勉強を体当たりで学習するわけで、生き方そのものに緊張感が宿ります。

さて、「〇〇しなさい。」と、言わない。これ、今の教育界に当てはめると全くの逆行のような気がいたします。毎日のように出される学校や進学塾からの宿題、「明日までに、ここまでやってきなさい。」「テスト終了後、ノートを提出しなさい。提出なき場合は成績に影響します。」

子どもたちの積極的な気持ちはカットされ、ただ成績という魔物の中に埋もれて行きます。溺れ続けているだけの日々になります。

成績さえよければいい・・・。

ここに通う子たちの中でも、私立に通うお子さんのほうが宿題は多いように感じます。全く気持ちは前を向こうとはしません。宿題をいやいややっている子。その反面、自分のペースで黙々と取り組む子たちのほとんどは、学校の勉強から離れた気持ちを抱きながら向かっています。そのコントラストは大きなものです。いつでもご覧になってください。

特に中学校へ行きますと、中間テストや期末テストの結果に敏感に反応してしまう保護者の方のお子さんへの一言も、その類に入ると思います。どのような言葉であっても、彼らの中に最終的にまとめられる感情は、「成績を上げなさい」なのです。命令などしていないと思われても、そのように受け取られてしまえば同様です。

最近特に感じられることのひとつに、謝ることができない子が多いように感じています。子どもの失敗は親の責任、といったことなのでしょうか。明らかに子どもがしたミスであるのにもかかわらず、親が謝る・・・。

なぜそうなるのか、おそらく普段の生活の中で、お子さんに命令をされることが多くあるために、その命令を下した親に責任があるとお感じになられているのではと思います。ミスは指揮官の責任ですから・・・。

子が育つということからは、全く逆行したことだと思います。

子が育つということは、体が育つと平行して、心が育つことです。心の成長には、自らの心の動きを試していかなければなりません。そのたびに起こる失敗を糧に成長します。

先日届いた同じように教室を経営されている友人からの手紙にありました。

『私の人生訓・・・頭で苦労するものは冷たくなり、体で苦労するものは、温かくなる・・・これ勉強至上主義は親不孝を育てやすいということ』

最もだと感じました。つまり勉強漬けで生活する子は、きっと家の中のお手伝いなど全くしない子なのだろう。だから家族は皆疎遠になり、思いやりも育たない。家族崩壊の始まり。

自由奔放に、自己の行動にしっかりと責任を持ち成長する。自分はどうあるべきか。家族はどうあるべきか。生きるとはどういうことなのか。学ぶとはどういうことなのか。本当の本物の勉強とはどのようなものなのか。自由に考え自由に羽ばたく。そしてしっかりと責任を取りながら生きる。

私にはこの教室を始めて一貫してきたことがあります。それは「勉強の中で命令はしない」です。

今の自分が精一杯に生ききっていればそれでいいじゃないか。

逃げを選ばない自分・・・１００点。

楽を選ばない自分・・・１００点。

前向きに生きようとする自分・・・１００点。

これが君たちだけじゃない、君たちにとって一番大切な家族も幸せになる生き方なのかも・・・。